

ARTIZON
MUSEUM

画家の手紙
Artists' Letters



画家の手紙

Artists' Letters

はじめに

新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の事態により、私たちの日常は様々な制約に晒され、これまでのように県や国を超えての自由な往来や、対面による人との再会および会食にも躊躇することを余儀なくされました。この3年の間に、家に籠もる自粛生活を経験し、遠く離れた家族、あるいは近くにいっても会う機会の減った友人と改めて近況を確認する際、これまで以上にメールを送ったり、オンラインで話したりする機会が増えたのではないのでしょうか。

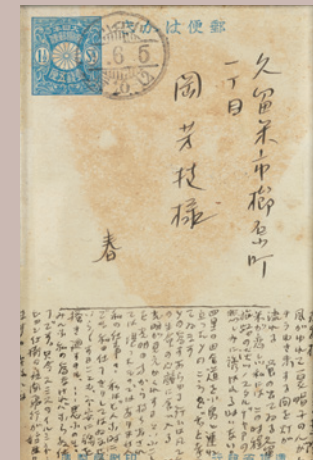
この特集コーナー展示では、近代の画家たちにとって主な連絡手段であった手紙に注目したいと思います。かれらは、遠く離れた場所にいてすぐに顔を合わせられない人とも、手紙の交換によって密に交際していました。かしまった内容のものもありますが、気軽に交わされたものも多く、現在の我々がメールあるいはLINEなどのコミュニケーションアプリで連絡をとりあうのと同じ感覚で、手紙を送りあう様子がうかがえます。

かれらの手紙には師弟、先輩、後輩、友人、妻、恋人、子に対する思いや、創作にまつわる悩みや苦労、エピソードが記され、ときに画家の人柄がかいま見えます。それらの要素は、作品そのものを解読するヒントになることもあれば、我々が作家や作品をより身近に感じられる、いわば「創造の体感」を促すツールになることもあるでしょう。

石橋財団コレクションでは、美術館にゆかりの深い日本近代の洋画家たちが送った手紙や、画家宛てに届いた手紙を一部収蔵しています。それらを交えて、画家の手紙にまつわる物語とともに作品をご紹介します。

恋人への手紙 — 古賀春江

古賀春江《自画像》は葉書に描かれた、作者20歳のときの姿です。古賀の故郷でもある福岡県久留米市に住む岡好江に宛てて東京から出されたもので、二人が出会った翌1916（大正5）年6月5日の消印があります。頬を紅潮させた自身の姿が大きく描き込まれており、恋人に見せる表情が捉えられた私的な自画像といえます。この葉書を受け取った好江は、心ときめかせながら眺めたのでしょうか。この葉書の数ヶ月後に好江は上京し、二人は結婚します。古賀が38歳で亡くなるまで、好江はその創作活動を献身的に支えました。

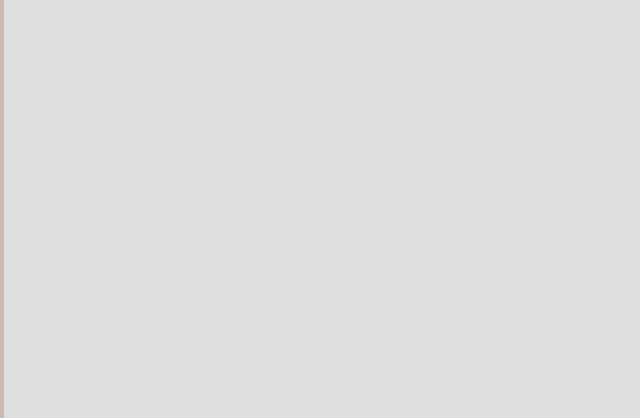


(図版1) 古賀春江《自画像》1916年、水彩・紙（葉書）

KOGA Harue, *Self-Portrait*, 1916, Watercolor on postcard

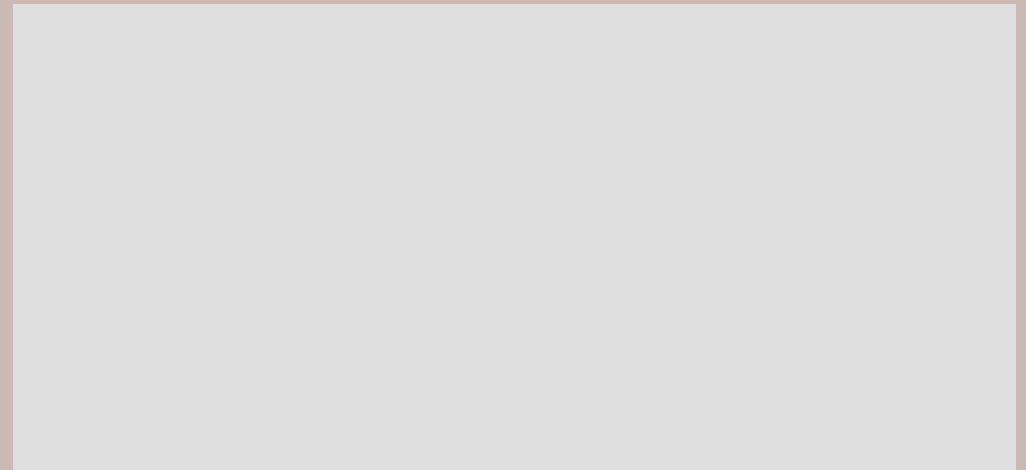
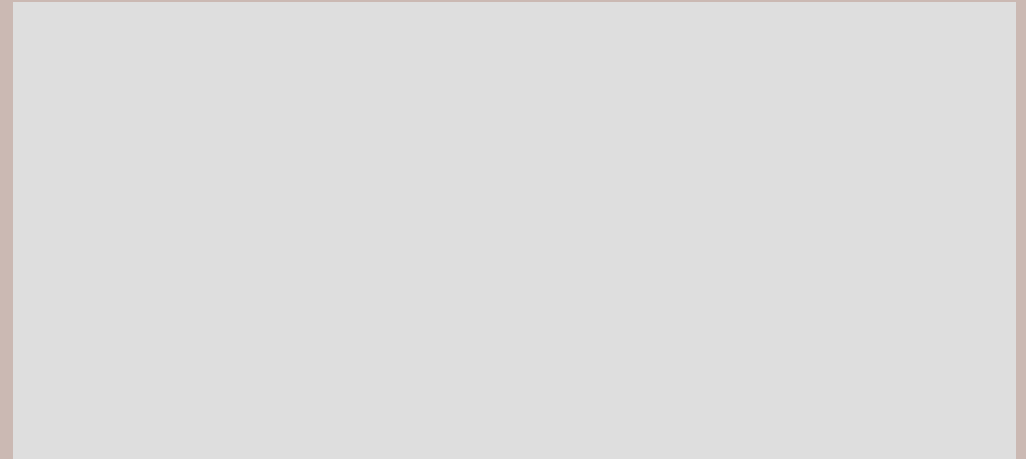
家族への手紙 — 坂本繁二郎

坂本繁二郎が、滞欧中に娘の幽子に宛てた年賀状です。イタリアで「老婆」をモデルに描いていることが記されています。「ユウチャンワ 今 ウタデモウタッテ オエンバタデヒナ タボッコデモシテイルダロー」。遠く離れた日本に残してきた娘を気遣う様子が伝わってきます。



(図版2) 坂本繁二郎「幽子宛年賀状」1921-24年頃
SAKAMOTO Hanjiro, *New Year's card to Yuko*, c. 1921-24

坂本繁二郎の義妹、権藤俊子宛ての書簡です。「ぬいの色彩に心得て置て都合のよからふと思わるゝ色の見へ方の原則を茲^{ここ}に一つ二つ書いて見ます」とあり、坂本が義妹のために、裁縫に生かせる知識として、色相環図を織り交ぜつつ色の見え方を丁寧^{ていねい}に解説しています。坂本の色に対する意識がうかがえる貴重な資料です。



(図版3) 坂本繁二郎「権藤俊子宛書簡」(部分) 1914年4月16日
SAKAMOTO Hanjiro, *Letter to GONDO Toshiko*, Part of the letter, 16 April 1914

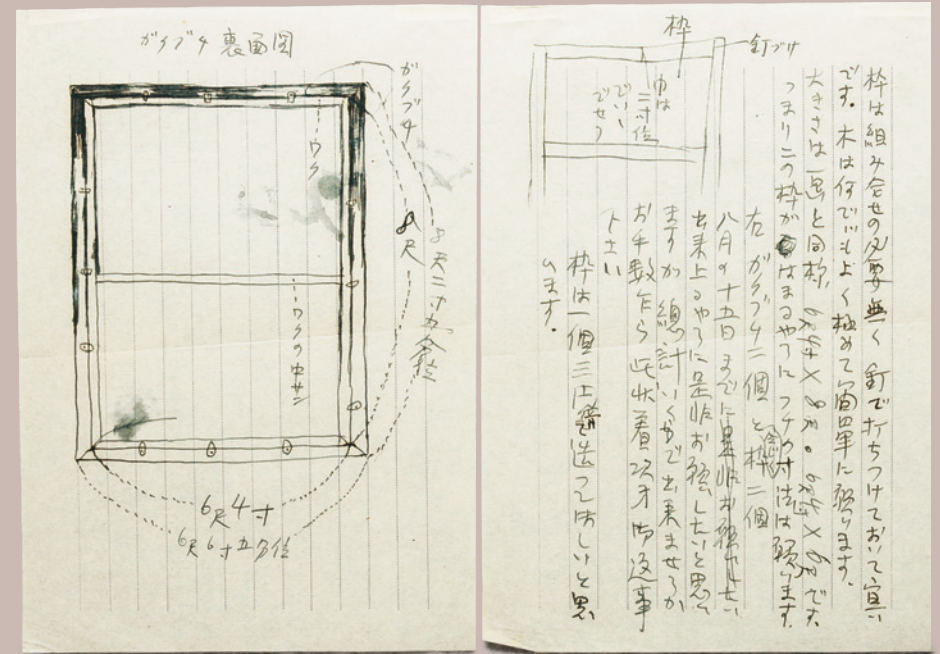
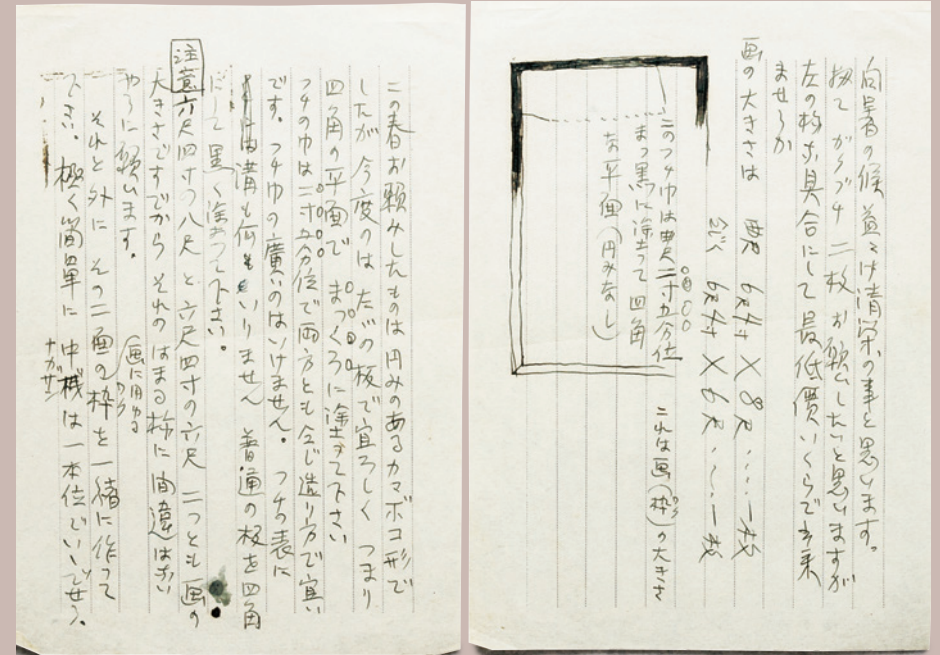
額縁注文の手紙 — 古賀春江

古賀春江が、額縁2点を依頼する内容の書簡です。古賀の遺品の中に残されていたもので、封筒はなく、この書簡が下書きであったのか、結局出さずに終わってしまったものなのか、あるいは完成した額縁の納品とともに作者に返されたものなのか、今となってはわかりません。

この中で、古賀は黒い額縁2点を依頼しています。額縁の縁について、以前依頼した丸みのあるかまぼこ型ではなく、平たい板で制作して欲しいと細かな指示を出しています。また、2点は6尺4寸×8尺(193.9×242.4cm)、6尺4寸×6尺(193.9×181.8cm)と、120号から200号前後のかなり大きなサイズであることがわかります。現存する古賀の作品で最大のものは100号です。依頼予定であった額縁にはどのような作品を収める予定だったのでしょうか。現在所在不明となった作品か、あるいは制作を断念したものか、いずれにせよ意欲的な大作を構想していたことが推測されます。

書簡の年代は不明ですが、最大級の古賀の作品として考えられるのは《涅槃》(1923年9月発表)と《グループ》(1924年4月発表)で、いずれも現在は所在不明です。当時の新聞から《涅槃》は、2メートルを越す大画面であったことが知られています。注文予定の額縁がその2点のためのものであれば、この書簡は1923(大正12)年頃のものとして推察されます。

(図版4) 古賀春江「額縁依頼の書簡」年代不詳
KOGA Harue, Letter Placing an Order for a Frame, Year unknown



坂本繁二郎旧蔵の絵葉書

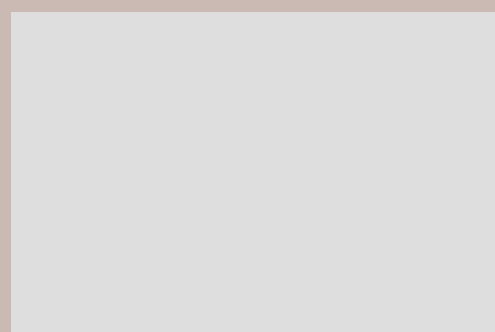
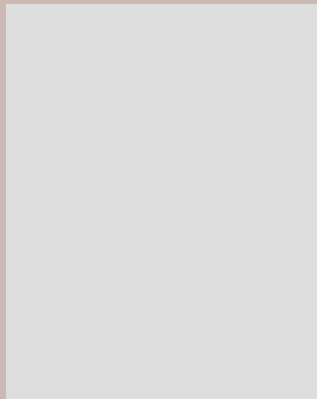
坂本繁二郎が1921(大正10)年から3年間のフランス留学時に収集した絵葉書が収められたアルバム(図版5)です。友人、知人から坂本宛に郵送された葉書と、未使用の絵葉書が1冊のアルバムに収められています。未使用の絵葉書については、坂本が訪れたことのあるミレーの家のあるバルビゾン村(図版6)や、クールベのアトリエのあるフランス東部の町オルナンの絵葉書なども含まれています。

また、坂本はフランス北西部のブルターニュ地方に惹かれ、たびたび出かけました。現地から日本の友人に宛てた書簡で、海岸が房州に似ていると伝えており、この地方に滞在しながら、青木繁や森田恒友と青春時代に出かけた千葉県^{めら}の布良海岸に思いを馳せていたことがうかがえます。

アルバムには、ブルターニュ地方の街並みや港、各地域の装束を身にまとう人々の絵葉書(図版7)もあります。コアフと呼ばれる白い頭巾や髪飾りを身につけた女性の絵葉書が特に多く、坂本がモデルにもこの頭巾をかぶせて描いた(図版8)ことから、このモチーフに関心を抱いていたことがわかります。坂本が今から100年前に目にしたであろう街並みや風俗をこれらの絵葉書からも見出すことができます。

(図版5) 「坂本繁二郎旧蔵滞欧期のアルバム」1921-24年頃
Album of Postcards from Europe, formerly in the Collection of Sakamoto Hanjiro, c. 1921-24

(図版7) 「坂本繁二郎旧蔵滞欧期のアルバム」1921-24年頃より
From the Album of Postcards from Europe, formerly in the Collection of Sakamoto Hanjiro, c. 1921-24



(図版6) 「絵葉書：バルビゾン— 井戸と画家 J. = F. ミレーのアトリエ」
Postcard, "Barbizon – Well and Wacking [Well and Workshop] of the painter J. - F. Millet"



(図版8) 坂本繁二郎 《老婆》1923年、油彩・カンヴァス
SAKAMOTO Hanjiro, Woman, 1923, Oil on canvas

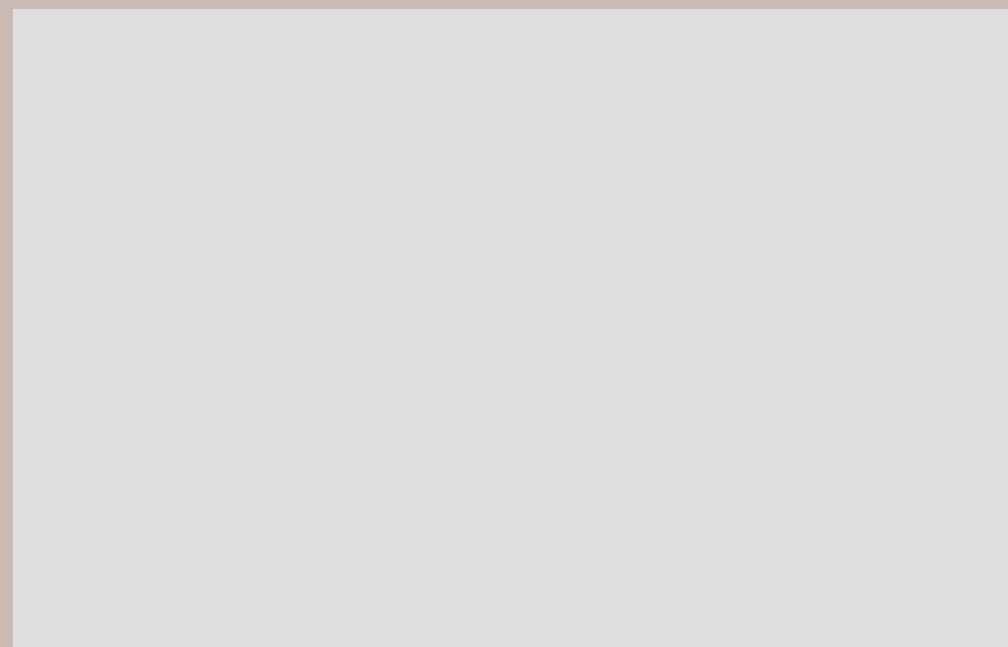
安井曾太郎《林檎》と12通の手紙

安井曾太郎《林檎》(図版9)には、皿に盛られた8つの林檎が描かれています。この林檎を載せた皿は、安井の弟子でのちに美術商となった瀬津伊之助から借りうけたもので、しばらく安井の手元に置かれていたようです。安井は、この頃、静物画の題材として陶磁器と果物の組み合わせを繰り返し描きました。《レモンとメロン》(1955年、石橋財団アーティゾン美術館蔵)や、雑誌『文藝春秋』第27巻第4号の表紙絵《ギリシャの壺と林檎》(図版10)などにもその試みが見られます。安井が他人から借りてまで描きたいと考えたこの皿は、口縁に矢羽根と菊花の文様があしらわれた古九谷(図版11)で、背景の地の文様とともに作品を装飾的に仕上げる重要なモチーフとなっています。

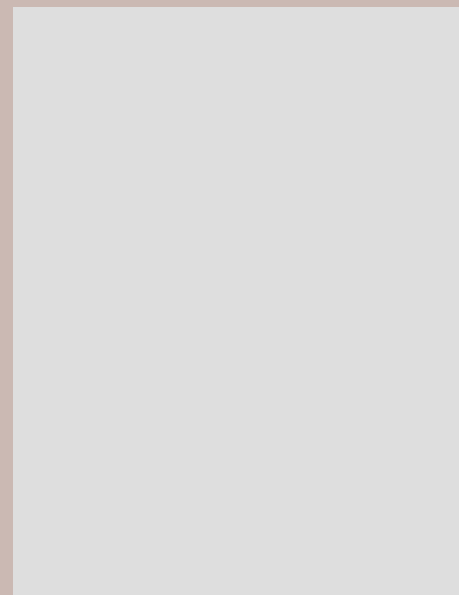
この皿は、このたび新たに石橋財団の所蔵となりました。収納用の桐箱には緩衝材として新聞紙が用いられていて、その中から偶然紛れ込んだと思われる12通の手紙が見つかりました。それらは弟子たちから安井へ宛てられた葉書、第2回アンデパンダン展の連絡事項を伝える書簡、美術工藝会による絵葉書製作のための撮影許可の依頼、異動の挨拶状や舞台の案内状などです。弟子たちからの葉書には一水会展の出品について触れるものが多く、なかには落選して次回の参考のために一度批評を請いたいという内容のものもあり、安井が弟子たちから慕われる様子がかがえる貴重な資料といえます。12通の手紙はいずれも1948(昭和23)年8~10月のもので、古九谷の皿がその頃瀬津のもとへ返却されたことが推測されます。



(図版11) 日本 有田 《古九谷花鳥文皿》江戸時代 17世紀
JAPAN, Arita, Dish, decorated with flower and bird design in overglaze enamels, Edo period, 17th century



(図版9) 安井曾太郎《林檎》1942年頃、油彩・カンヴァス
YASUI Sotaro, *Apples*, c. 1942, Oil on canvas



(図版10) 安井曾太郎
《ギリシャの壺と林檎》(『文藝春秋』第27巻第4号/1948年4月号 表紙絵)
墨、鉛筆・紙、寄託作品
YASUI Sotaro, *Greek Vase and an Apple* (Cover for the magazine
Bungeishunju, vol.27, no.4 / April, 1948), *Sumi* and pencil on paper,
On long-term loan

切手になった名画

手紙に欠かせないもののひとつに切手が挙げられます。昨今は多様な種類の趣向を凝らしたデザインのものがたくさんありますが、日本では1871(明治4)年に日本で最初の切手が、さらに、1894年には初の記念切手が発行され、それ以来、厳正なる審査のもと図案の選定が行われてきました。時代によって図案の傾向も変遷するなかで、高貴な肖像画とは異なる一般の絵画作品も記念切手の図柄として採用されるようになります。以下のとおり、当財団コレクションの中にも切手図案に採用された作品がいくつかあります。

切手発行年	作家名《作品名》制作年
1970年	岡田三郎助《婦人像》1907年 *図版13
1979年	青木繁《わだつみのいるこの宮》1907年
1980年	藤島武二《黒扇》1908-09年
2021年	黒田清輝《針仕事》1890年



(図版12)「切手：岡田三郎助《婦人像》」1970年、郵政省(当時)発行、個人蔵

Postage Stamps: OKADA Saburosukeye, *Portrait of a Lady*, issued by the Ministry of Posts and Telecommunications (at that time) in 1970, Private collection

(図版13) 岡田三郎助《婦人像》1907年、油彩・カンヴァス

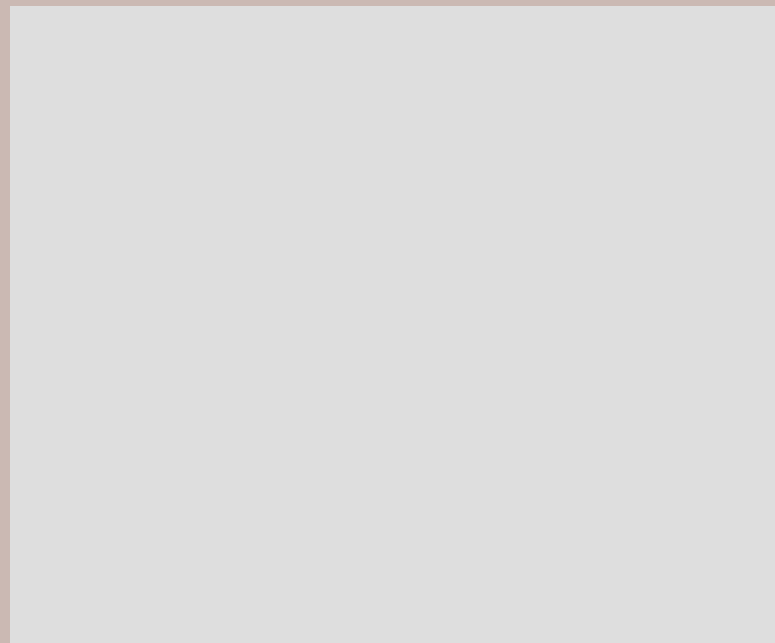
OKADA Saburosukeye, *Portrait of a Lady*, 1907, Oil on canvas

葉書になった名画

ここにご紹介する坂本繁二郎《放牧三馬》(図版15)の絵葉書(図版14)は、坂本がこの作品を出品した二科展で販売されたものです。この葉書が発行された1932(昭和7)年当時は、その販売益の一部が画家に収入として還元されていました。また、それらの葉書で見られる作品の一部は現在所在不明のものもあり、貴重な図柄や色を伝える記録でもあります。《放牧三馬》は、1956年と1966年に作者自身によって修復加筆されたため、この絵葉書は発表された当初の図様を伝えてくれます。

(図版14)「絵葉書：坂本繁二郎《放牧三馬》」1932年
Postcard: SAKAMOTO Hanjiro, *Three Grazing Horses*, issued in 1932

(図版15) 坂本繁二郎《放牧三馬》1932年、油彩・カンヴァス
SAKAMOTO Hanjiro, *Three Grazing Horses*, 1932
Oil on canvas



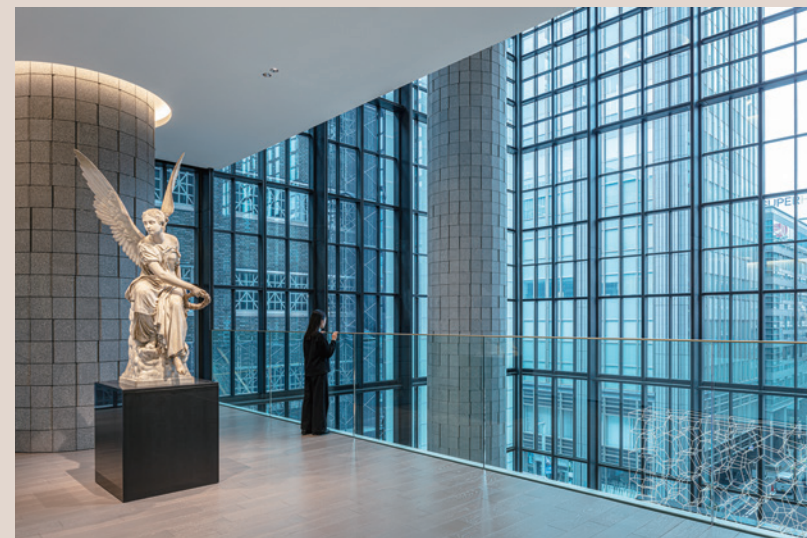
Artists' Letters

Having encountered an unprecedented situation of the spread of COVID-19, numerous restrictions were imposed on our everyday life, and we have had to think twice about coming and going freely within Japan and abroad, and seeing or dining with others face-to-face as we used to. During the past three years, we have experienced self-quarantine and confining ourselves to our homes. In order to check how family members living away from home are or to keep in touch with friends who live nearby but whom we have had less chances to see recently, opportunities to send emails or speak with them online may have increased.

This corner features letters, which were the main means of communication for modern artists. By exchanging letters, they were able to keep in close touch with people located far away, whom they could not meet in person so easily. The content of some of these letters are formal, but many reveal casual correspondence. These letters show us how the modern artists sent letters to one another just as we nowadays communicate by email or LINE and other smartphone apps.

The letters record the artists' feelings toward their teachers, students, older and younger colleagues, friends, spouses, lovers, or children. The artists write about worries, struggles, or episodes concerning their work. Consequently, we occasionally get to catch a glimpse of each artist's character. Such factors can provide us with hints to decipher a certain artwork or function as a tool to encourage "Experiencing Creativity," through which we should be able to feel closer to the artist or that artist's work.

The Ishibashi Foundation Collection includes letters sent by or sent to modern Japanese Western-style painters closely connected to the museum. Such letters are introduced together with related works and anecdotes.



ARTIZON MUSEUM

アーティゾン美術館は、1952年、東京・京橋に開館したブリチストン美術館を前身に、2020年、展示室の拡張や最新設備とともに大きく生まれ変わりました。美術館のコンセプトは「創造の体感」。古代美術、印象派、日本の近世美術、日本近代洋画、20世紀美術、そして現代美術など約3,000点にわたる石橋財団コレクションを中心に独自の展覧会企画や教育普及、様々な研究活動を行っています。「ART」(アート)と「HORIZON」(地平)を組み合わせた新館名の「ARTIZON」(アーティゾン)には、これらの美術館活動を通じ時代を切り拓くアートの地平と創造性を、多くの方々に感じ取っていただきたいという願いが込められています。

画家の手紙 Artists' Letters

石橋財団コレクション
特集コーナー展示 画家の手紙
2023年2月25日(土)―5月14日(日)
アーティゾン美術館

企画・執筆：伊藤 絵里子
デザイン：田畑 多嘉司
秋本 真奈帆
翻訳：小川 紀久子
印刷：株式会社 野毛印刷社

発行・著作：
公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館
〒104-0031 東京都中央区京橋1-7-2
©2023 Artizon Museum, Ishibashi Foundation

Selections from the Ishibashi Foundation Collection
Special Section Artists' Letters

25 Feb. (Sat)–14 May (Sun), 2023
Artizon Museum

Curation and Texts: ITO Eriko

Design: TABATA Takashi
AKIMOTO Manaho

Translation: OGAWA Kikuko
Printed by Noge Printing Corp.

Published by
Artizon Museum, Ishibashi Foundation
1-7-2, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan
www.artizon.museum

